

(Liyan cing)、祖父は Hai seng、曾祖父は Cang an である。譜図には計連慶、有財父子の名がみられず、少なくとも祖父の時代まで記入が続けられており、それ以降はおこなわれなかったことがわかる。また、記述に際してはおおむね12代まで墨書で、またそれ以降は朱書でおこなわれており、この譜図が成立したときに、族祖より13世以降が存命であったことがわかる。そして、譜図の記述から、計氏はもともと長白山満族で、吉林烏拉（現在の吉林市）よりこの地に来たこと、この譜図が、道光19年（1839年）10月20日の作製であることが判明した。のちの世代は、順次、満洲語で書き加えられていったとおもわれる。

同日11時15分、予定の調査を終了して、富裕県の宿舎（北原賓館）に戻った。宿舎到着は12時15分であった。

補注 細谷良夫氏は『中国東北部における清朝の史跡』のなかで、「三家子屯」調査をまとめられている。筆者は細谷氏が調査した人物とは別の住民から独自に聞き取りをおこなった。聞き取り相手による異同を示すために、報告書とは相違する記録を提示したので、報告書と併照されたい。

<特集3>

『盛京城闕図』の発見と豫親王府

松浦 茂

1

天命10年（1625）に太祖ヌルハチが、突然に居城をそれまでの東京城（遼陽近郊）から瀋陽城に遷して以来、順治元年（1644）に入関するまでの20年間は、瀋陽が清朝の都となった。ヌルハチは直ちに宮殿等の建造にとりかかったが、翌11年に死去したために彼自身は明代のプランを根本的に変更することはできなかった。後を継いだ太宗ホンタイジも首都の改築を続け、天聰5年（1631）には城門を4から8に増やして、大通りも十字型から井字型に変えている。こうして二代の間に都城の整備は大いに進んだが、この時期の詳細なプランは、これまではほとんど不明であった。

さて清朝時代の瀋陽（盛京）の地図としては、『盛京通志』（康熙23年刊）の図が今までは最も古かった。ここに描かれる瀋陽のプランは康熙23年前後のものであって、主要な建物の配置はその後20世紀初めまでほとんど変わっていない

いが、しかし入関以前の状況はそれとは大変に違っていたらしい。たとえば『満文老档』に Han i boo（以下汗宮と称す）と記される宮殿が、清初には北門付近にあったが、『盛京通志』にはその存在はまったく記載されていない。一般に『盛京通志』から清初の瀋陽城を復元することは不可能である。

ところで1982年に中国第一歴史档案館において、1枚の地図が発見された。この『盛京城闕図』は、110×128センチメートルの大きさに墨で描かれているが、宮殿は黄色と緑色、一般の家屋と城壁等は青色、そして門や柱等は赤色で彩色されていた。建物の名称は大部分は満洲語で表記し、一部には漢字も使用する。この地図においては瀋陽城はすでに8門を備え、井字型の街路によって区切られている。そして何よりも興味深いのは、今日の瀋陽故宮の建物以外にその周囲に汗宮や親王府、さらには六部、都察院、理藩院、奉天府、承德県等の数多くの宮殿、親王府、衙門が記されていることである。これらの多くは『盛京通志』の地図には現れないし、たとえ現れても現在とは場所がかなり変更になっている。『盛京城闕図』は康熙初めごろまでの瀋陽城を描いたものと見られ、その発見によって入関前後の瀋陽城のプランは、ほぼ明らかになったのである。（鉄玉欽・王佩環「瀋陽天命“汗宮”与王府初探」『黒竜江文物叢刊』1983年第3期。以下同じ。）

2

『盛京城闕図』によれば、当時瀋陽には全部で11の親王府（郡王府）があった。大多数は井字型に配置された目抜き通りの両側に沿って建てられていたが、ヌルハチの第十五子ドドの邸宅である豫親王府は、北門のすぐ南にあった汗宮と最も近く、その南西方向に位置していた。この豫親王府跡と推定される建物は、現在でも瀋陽随一の繁華街、中街を北に入った住宅地の中、会蘭亭高級浴池の東に残っている。私は1988・89年度文部省科学研究費補助金による海外学術研究「清代東北地域の総合的研究」（代表者：松村潤日本大学教授）の一環として、89年9月14日から10月19日まで中国において調査研究を行う機会を得たが、その間遼寧省においては瀋陽市を中心に各地に点在する清朝前期の史跡を調査した。そして9月19日午後には遼寧社会科学院の助理研究員曹立志氏の案内で、豫親王府跡を実地に見学することができた。その建物が豫親王府と推定されるようになったのは、『盛京城闕図』の発見がきっかけとなっているので、調査を目的に訪れた日本人としては、おそらく私が最初であろう。

豫親王府跡は現在、瀋陽消防科学研究所招待所として利用されている。今では続きになった入り口と両脇の建物（いわゆる大門と門房）が残るだけである。建物の壁面は下半分は石で作られており、上半分は黒い磚でできている。両脇の部

屋には窓がそれぞれひとつずつ、外に向かってあいている。屋根は全体に黒い瓦でふかれ、西端に煙突が立つ。屋根のてっぺんの両側の瓦は独特な形をしており、上に反りかえったように見える。私は建築の方面にはまったく知識をもたないが、これらの点はみなかつての満洲族の家屋に共通する特徴であって、豫親王府跡と考えてまずまちがいないであろう（張馭寰『吉林民居』北京、1985年）。中に入ると、すぐに庭がある。以前庭の真中には両面に透かしぼりのある石製の照壁があったらしいが、私が調査した時点では見当たらなかった。ただ招待所の建物の下に昔の柱の礎石と表面に彫刻のある石が、幾つか無造作に放置されているのを発見したにすぎない。

3

近代化による開発の波は、世界各地において史跡の破壊と荒廃をもたらしたが、中国でも例外ではない。ここ瀋陽では以前は町中あちこちに、清朝前期に属する史跡が存在していたが、今度実際に現地を訪問して、その幾つかはすでに消滅してしまったことを知り、非常に残念に思った。そうした中であって豫親王府の新たな発見はとても喜ばしいが、それだけにとどまらず他の史跡も、社会の進歩と調和させながら今後とも長く維持保存されていくことを、最後に希望したい。

<特集4>

瀋陽雑報

細谷良夫

1991年度から開始された国際共同研究「清朝の国家形成期をめぐる諸史料の総合的研究」の実施にともない、江夏由樹氏（一橋大学経済学部）と共に9月14日から18日まで瀋陽を訪れた。ここ数年間は毎年のように瀋陽を訪れる機会があったが、89年は長春から大連に向かう途中で完成したばかりの瀋陽新空港で1時間余りを過ごしたのみであり、90年は吉林省の史跡考察を終了した後の慌ただしい滞在で最近の史跡の状況は不明のままであった。

遼寧社会科学院と学术交流を行い遼寧省檔案館で檔案閲覧を行う合間に、江夏と二人で瀋陽市内の各史跡を歩き、以前にも訪れている史跡の現況の一端を知ることが出来た。以下に、報告書にも記した二、三の史跡のその後の状況などを記しておきたい。

今年は「9、18事件」60周年にあたり、我々の訪問時にはこれを記念する